

日本語格助詞の動詞性に関する考察

—— 中国語介詞との比較から ——

王 利 民

1. はじめに

現代中国語の“介詞”に対応する日本語の表現は“格助詞”が圧倒的に多い。そのことは“格助詞”と“介詞”がそれぞれ同じような統語的機能を担っているものであることを窺わせる。本稿は現代中国語の“介詞”が本来的に動詞性の強いものであることから、日本語の“格助詞”もそれに対応して、動詞性の高いものから、機能語性の高いものまで類分けされることを予測し、具体的な表現例を分析しながら、それを明らかにしようとするものである。

まず“格助詞”と“介詞”が従来、それぞれどのように定義されてきたかについて見てみよう。

“格助詞”については：「体言および体言に準じるものに承接し、その承接部を、連体関係、連用関係のいずれかの関係つまり、資格、〈格〉によって、後続する構文成分と連結し、所属各語のそれぞれの意味によって、特定の論理的な関係を表示するもの」¹⁾とされてきた。

一方“介詞”は：「介词又叫前置词，是能附在名词前面并与名词组合起来修饰谓词的虚词。介词和后面的成分（主要短划线名词、代词、名词性词组）发生关系，即合起来组成介词词组。介词词组作句法成分修饰后面的谓词性成分」²⁾が一般的な定義である。

しかし、中国語の“介詞”は日本語の“格助詞”とは違って、そのほとん

どは動詞から転化したものである。中には現代中国語で“動詞”と“介詞”の二つの機能を有しているものもすくなくない。もっとも、個別の言語表現において、それを“動詞”とするか、“介詞”とするかについては、見解の異なるものが多く、動詞、介詞、副動詞、連結詞など諸説が見える。

黎锦熙《新著国语文法》では、“介詞”の範囲を比較的広くしている。「在，往，朝，到，上，下，出，进，过，离，给，替，帮，靠，挨着，依，拿，用，带，领，比」などいずれも“介詞”としている³⁾。つまり、これらは単独で述語になる時は“動詞”であり、そうでない場合は“介詞”であるとするのが一般的である。王力《中国语法论》は、「与，以，因，由，自」等は動詞から転化した“連結詞”で、「从，往，在，朝，向，靠，用，拿，依，替，为，对，到，比」などは“動詞”であるとする⁴⁾。吕叔湘《语法学习》は、「把，被，从，往，向，给，跟，替，对于，关于，除了」などを“副動詞”としている⁵⁾。《现代汉语语法讲话》の動詞連用文（连动句）では、“介詞”も連用文の中の動詞と見なしている⁶⁾。

以上の諸説から、中国語の“介詞”の多くは単独で述語にならなくても、動詞性の非常に高いことが窺える。

本稿は動詞性の高い“介詞”に対応している“格助詞”の動詞性、機能語性について考察することが目的であるので、“介詞”プロパーとして定着していないものでも、それに対応する日本語表現が“格助詞”であるものは比較の対象とする。例えば：

・我们在教室里听课。

私たちは教室で授業を受ける。

上記表現例の「在」は、邢公畹《现代汉语教程》によれば、「在教室里」は述語の「听课」がなくても、成立するので、動詞であるとしているが⁷⁾、それに対応する日本語の表現は“格助詞”「で」であるから、考察の対象とする。

2. 中国語“介詞”の日本語表現上による類分け

中国語の“介詞”に対応する日本語の表現は“格助詞”が圧倒的に多いことは既に述べたが、“格助詞”だけでは、充分にその“介詞”の表す意味を反映することのできない表現例も多く存在する。それは、概略次の四類に分けられる。

A. 「格助詞＋動詞」となるもの

。依照法律办理。

法に基づいて処理する。

。照敌人头上一刀砍去。

敵の頭をめぐけて斬りつける。

。这条铁路线是沿着海岸线修建的。

この線路は海岸に沿って作られている。

。按年龄分组。

年齢によってグループ分けする。

。靠工资生活。

給料によって生活する。

。依法惩处。

法律によって処罰する。

。最近看了一些关于国际问题的资料。

最近国際問題に関する資料を見た。

。关于学校增加招生名额，你们准备采取什么具体措施？

学生の定員を増やすことについて、どのような具体的措置をとるつもりですか。

。这篇文章除了附表和说明，不过2500字。

この文章は表と説明を除くと、2500字しかない。

。他朝我挥手，我朝他点头。

彼は私の方に手を振って、私は彼にむかってうなずいた。

◦ 通过组织了解情况。

組織を通して、状況を把握する。

以上の表現例に現れた中国語の“介詞”「依照，照，按，靠，依，关于，除了，给，朝，通过」は日本語で表現すると、いずれも「格助詞＋動詞」の形になる。

B. 「形式体言となるもの

◦ 为人民服务。

人民のために奉仕する。

◦ 为他吃了不少苦头。

彼のためにずいぶん苦労した。

◦ 照你说的办。

あなたの言うとおりにやりましょう。

◦ 大家替他高兴。

みんなは彼のために喜ぶ。

◦ 趁着晴天，抢收麦子。

晴れているうちに、急いで麦を刈り入れる。

◦ 趁热喝。

あついうちに飲む。

以上の表現例に現われる“介詞”に対応している日本語の表現は“目的”，“時間的な間”，“基準”などを表す形式体言である。

C. 「格助詞＋動詞或いは助動詞」になるもの

◦ 墨水瓶叫弟弟打翻了。

インク瓶は弟にひっくりかえされた。

◦ 窗户叫大树挡住了阳光。

窓は大きな木で太陽の光をさえぎられた。

◦ 活都让他们干完了。

仕事は彼らの手ですっかりかたづけられた。

◦ 小张被大家批评了一顿。

張さんはみんなにひどく批判された。

・这句话可能被人误解。

この言葉は人に誤解されるかもしれない。

以上の表現例に現れた「叫，让，被」は「施受介詞」⁷⁾と言われているものであるが，影響と作用の出どころを表す“格助詞”「に」と「で」だけで対応するものではない。

D. 「格助詞」になるもの

このグループに属する“介詞”が最も多い。そして，それらに対応している日本語の表現は“格助詞”のすべてを包含している。

以下，個別に詳細に分析していく。

D 1. “介詞”と「で」

①我的儿子在育才小学上学。

私の息子は育才小学で勉強している。

②我们经常在学校食堂吃饭。

私たちはいつも学校の食堂で昼食をとる。

③用笔写字。

筆で字を書く。

④用开水沏茶。

お湯でお茶を入れる。

⑤将心比心。

心で心をはかる。

⑥以实际行动，响应党的号召。

実際の行動で党の呼びかけにこたえる。

⑦打水路走，两天可以到。

水路でいけば，2日で着ける。

⑧当众表演。

大衆の前で演ずる。

⑨你要当着大伙说清楚。

みんなの前ではっきり言いなさい。

以上の表現例に現われる「在，用，将，以，当」はいずれも動詞性が高く，「在」は「ある，いる」，「用，将」は「用いる」，「以」は「……をする」，「当」は「……を前にする」となる。「打」は北方方言の色あいが強いが，普通語では通常「从」を用いることが多い。この「打，从」は「来」と呼応してはじめて介詞としての機能を果すが，経過する場所を示す場合，移動的な意味が含意されている。

そこで，これらの動詞性の高い“介詞”に対応している日本語の「で」は動詞的性格を有するものであるのであろうか。

先行研究には「格助詞は別に格関係を成立させるものではなく，格関係をはっきりさせるところに，その機能の本質があると見るべきであろう」⁸⁾との指摘が見えるが，いまひとつ「で」について詳細に見ていく。

文語では「にて」の形で，場所，手段などを示す用法があり，この「にて」は現代語の格助詞「で」と同じ機能を持っている。「にて」の「に」は格助詞で，「て」は接続助詞であるが，接続助詞「て」は格助詞「に」には承接できないとされている。しからば「に」と「て」はどのようにして，「にて」が形成され，この形で場所，手段などを示すようになったのであろうか。晓娟〈多重意义的格助词“で”〉は「に」と「て」の間にはもともと動詞が入っていたと。そして次のような表現例をあげている。

・父は庭で（＝において）植木の手入れをしている。

・彼はこの論文で（＝によって）有名になった。⁹⁾

文語の「にて」が音声上の変化を受けて「で」になったことが，「で」にさまざまな用法を生じさせたのである。

以上から「で」は極めて動詞性の高い格助詞であることがわかる。

D 2. “介詞”と「から」

①我从北京来。

私は北京からきたのです。

②从实际情况出发。

実際の情況から出発する。

③暑假从明天开始。

夏休みは明日からです。

④本次列车自北京开往上海。

当列車は北京から上海へ行く。

⑤向老师借了一本书。

先生から本を一冊借りた。

⑥打这往东走。

ここから東の方へ行く。

⑦由上到下。

上から下まで。

⑧你知道我在哪儿给你打电话吗？

私がどこから電話をかけているか知っていますか。

以上の表現例にある「从，由，自，打」は現代中国語では単独で「から」という意味を表す動詞としては用いられないが、移動という動的な意味の含まれていることは確かである。「在，向」は動詞としても用いられるが、例⑧の「在」は一定の距離が隔っていないと、「から」にはならない。例⑤の「向」は「先生に本を一冊借りた」のように「に」とすると、それは単なる静的事象と捉えられるが、「から」とすると、移動的行為が自ずと想起されることとなる。

このグループの“介詞”には移動という動的行為が想起されるものの、D1グループと比較すると、動詞性はやや低い。しかし、それに対応している日本語の「から」は動詞性が非常に高い。次の例を見てみよう：

- ・父からの手紙
- ・学校からの帰り

三浦つとむは《日本語の文法》で「ある語はその文の中で、一定の資格を持つにとどまるから、一つの語に対して、〈格助詞〉を重ねて用いることはありえない」¹⁰⁾と述べている。また、山田孝雄は「格助詞は決して、相互に

重ね用いられることのないものである。これは厳密な規定で、一步も犯すことを容さぬものである」と指摘している。¹¹⁾

しかし、上記の表現例「父からの手紙」、「学校からの帰り」においては何故に重ね用いられているのであろうか。これに対しては、それは「形式上の重ねであって、〈用言〉を省略し、それに附属する〈助詞〉だけを残しておく」と、現象的に二つの〈助詞〉が直結するかたちになる¹²⁾と説明されている。ここで、動詞（用言）が省略できるということは、その“格助詞”だけでも十分に、動作の存在を示すものであることを物語っていると解釈することができる。一方、中国語の“介詞”「从」にはこのような性質はない。この類には「からの」以外に「での」「への」「よりの」「までの」などがある。

また、「から」は単独でも用いられる。例えば：

・夏休みはいつからですか。

暑假从什么时候开始？

・学校は何時からですか。

学校几点开始上课？

上記のような「から」の用法は“介詞”の「从」には存在しない。「暑假从什么时候开始」には「开始」という動詞がなければ、表現としては成立しないのである。

D 3. “介詞”と「より」

①本办法自公布之日起施行。

当措置は公布日より施行する。

②从一百元起价。

百元よりする。

③从学校到车站，约需15分钟。

学校より駅まで15分ぐらいかかる。

④他的散文比诗写得好。

彼の散文は詩よりもよく書けている。

⑤他干起活来，比谁都泼辣。

彼は仕事を始めると、誰よりもバリバリやる。

表現例①②③の「自，从」は起点を示す“介詞”で、④⑤の「比」は比較の基準を示す“介詞”である。「より」は起点を表す点では、「から」と同じで、動詞性が高い。しかし、「より」は「演説，訓示のような固い話や文語的な文章にかぎられ，日常の会話などには，ほとんど使われない」¹³⁾

比較の基準を示す「比」は動詞として用いられる場合は「くらべる」であり，“介詞”として用いられる場合は，単に比較の対象を表すだけであり，動的な性格は有するものの，動詞性は低い。「より」は「Aの方がBより」「AよりはBの方が」というように，比較の対象をはっきりと示す表現形式をとらなければならないが，この表現形式から明らかであるように「に」と同じように静的な色彩が強く，機能語性がやや高い。

D 4. “介詞”と「へ」

①水往低处流。

水は低い方へ流れる。

②给妈妈的信。

母への手紙。

③那次悦的笑声，顺着盘山道向山顶飘去。

その楽しげな笑声はラセン形の登山道に沿って，山頂へ流れていく。

④陈大卯走出办公室，径直朝铸造车间那边走去。

陳大卯は事務室を出ると，真直鑄造作業場の方へ歩いて行った。

⑤王春生向前跨了一步……。

王春生は一步前へ踏み出すと……¹⁴⁾

“介詞”「往，给，向，朝」の出所はいずれも動詞であり，「往，向，朝」は「いく」「むかう」，「给」は「あげる」「渡す」である。それに対応している日本語の「へ」も動詞性が高い。帰着点を示す「に」と比較をすると，「へ」は進行の動作を表すが，進行を考えずに進行の結果だけを考えると，依拠物との関係が存在関係になるから，「に」を使う。〈席へ着く〉は他処から〈席へ移る〉のであり，〈席に着く〉は席へ移った結果〈席に居る〉のである」

ということになる。¹⁵⁾

また「〈決勝へ勝ち進む〉」には一戦一戦勝ち抜いていくプロセスが感じられるが、これを〈決勝に〉とやってしまうと、プロセスは全く消え去り、単なる到達点の表示に終わってしまう¹⁶⁾と説明することができる。

このような単なる到達点を表示する「に」と比較して、進行の動作を示す「へ」のほうがずっと動詞性が高い。また、例②に見られるように、「への」は、その「へ」と「の」との間に動詞が存在しなくても、“移動”という動作の存在が容易に窺える。

D 5. “介詞”と「を」

①向东看。

東を見る。

②他将钱和药交给了我。

彼は金と処方箋を渡してくれた。

③古人管眼睛叫目。

昔の人は眼睛を‘目’と言った。

④谁把这块毛巾弄脏了？

誰がこのタオルをよごしたんだ。

⑤拿我当小孩。

私を子供扱いする。

⑥在高空飞翔。

高い空を飛ぶ。

以上の「向，将，把，管，拿」などは、動詞としても用いられるが、“介詞”として用いられる場合は動的な性格は弱い。表現例①の「向」は日本語の「へ」と対応する移動動作の方向を表すそれではない。「将，把」は他動詞の対象を取り立てる時、「管」は主として人や物の名を呼ぶ時、「拿」は〈……に対して〉という意味で、静的対象物を示す時にそれぞれ用いられるものである。例⑥の「在」は移動する場所を示し、動的な性格を有している。

これに対応している表現例①～⑤の格助詞「を」は、動作，行為の対象を

示す助詞であり、例⑥の「を」は移動性の動作が経由する場所を示す助詞である。「を」は対象格助詞として用いられる場合は機能語性が高い。また「で、へ、から」などのように、後続する動詞を省略して、動詞のかわりにその動作の存在を示すことができないばかりでなく、〈酒持ってこい〉、〈これくれ〉などの表現に見られるように、「を」そのものが脱落することもある。

しかし、〈高い空を飛ぶ〉の「を」の場合は、動作との結びつきが強く、動作中心の表現だとしてよかろう。「を」には、動きが想起されるのである。

「を」に見られるこのような特徴については、山田孝雄につぎのような指摘がある。「〈逢坂にて人を別れける時に詠める〉という語があるが、〈人に別れける〉と言えばその人は静止的のものと考えられ、〈人を……〉と言えば、その人も我も動いているように考えられるのである。これらは「を」が動的の目標を示す語であり、「に」が静的の目標を示す語であるが為の差異である」¹⁷⁾

以上から、「を」は移動を表す場合には、動的な性格を有していることが解る。

D 6. “介詞” と「に」

①他在桌子上放了几块钱。

彼は机の上に何元かのお金を置いた。

②这些意见我已经向领导反映过了。

これらの意見はすでに上部に伝えてある。

③把你的意见跟大家谈一谈。

君の意見をみんなに話さない。

④他上午已同我告别了。

彼は午前中すでに私に別れを告げている。

⑤我很愿意和大家讲一讲。

ぜひみなさんにお話ししたいと思う。

⑥国际形势于我们有利。

国際情勢は私たちに有利である。

⑦**报表已于三日前呈送上级。**

報告表はすでに三日前に上部に送った。

⑧**往本上写字。**

ノートに上字を書く。

⑨**给他去个电话。**

彼に電話をする。

⑩**小王对我笑了笑。**

王さんは私に笑いかけた。

⑪**广大侨胞对祖国都非常关心。**

大勢の在外同胞は祖国に大きな関心を寄せている。

以上の表現例に現れた「に」に対応している“介詞”は議論の余地なく機能語的なものであり、「に」と同じように動作、行為の対象、動作の帰着点を示すものである。前述のように「に」は「格助詞〈へ〉」に対して、静止の場合に使う。さらに〈を〉が動的目标を示すのに対比して、静的目標を示すものだとしても、性格づけられています¹⁸⁾

また「へ」に見られた「への」という形の用法も存在しない。「に」は機能語性の高い助詞である。

D 7. “介詞”と「と」

①**我跟你一起去。**

私は君と一緒に行く。

②**我和老王见过面。**

私は王さんと会ったことがある。

③**去年我同小王住在一起。**

私は去年王さんと一緒に住んだ。

④**目前的情况与去年不同。**

目下の情況は去年と異なる。

⑤**他与此事有关。**

彼はこの事と関係がある。

以上の表現例に現れた“介詞”は動作の相手や比較の対象を示しており、動詞性が低い。つまり、“介詞”だけで、後続する動詞がなければ、どのような動作が行なわれ、どのような状況が発生するのかはわからない。これに対応している「と」もまったく同じであり、「から、へ、で」などの格助詞のように、後続動詞がなくても、或いは省略されていても、動作や状況の具体的な内容が推測できるという動的な性格は有していない。

なお、「と」には「との」の形が存在するが、それは「と」と「の」との間に動詞が省略されていて、重ね用いられたものではなく、単なる連体修飾にすぎない。従って、「と」は機能語性が極めて高い。

D 8. “介詞”と「が、の」

「が、の」は主格助詞、領格助詞で、連用修飾の構文が成立しない。「が」は主体、主語を示すものであり、「の」は連体関係を表す。いずれも動的な性格はまったくない。これに対応する“介詞”はあるにはあるが、きわめて少ない。

①这事由我来做吧。

この事は私がやりますよう。

②花色样式，由你决定。

色柄は君が決めなさい。

③他在桌子上按了按文件。

彼は机の書類をおさえた。¹⁹⁾

表現例の①②の「由」には動作の主体を導く働きがある。これに対応している「が」もやはり同様であり、いずれも動詞性は存在しない。例③の「在」で示される場所には動作主の居場所は含まれず、目的語の表す事物の存在場所を示しているので、その場に「の」が対応しているものと考えられる。格助詞の「の」は連体語とでも言えるものであり、名詞と名詞の連体関係を表示し、中国語の助詞「的」と同様の役割を担っている。しかし、「の」には場合によっては、主述関係を構成するとき、「が」の代替をする働きがある。「が、の」の動詞性は低く、機能語的性格が高い。

D 9. “介詞” と「まで」

「まで」は副助詞であるが、「から」「より」とセットになって、終点、結末、限度などを示すことがある。これは格助詞としての用法である。

①毎日午前九時から午後二時まで授業です。

每天从上午九点到下午两点上课。

②夏休みはいつまでですか。

暑假到什么时候结束？

③冬休みには京都まで行ってきました。

寒假到京都去了一趟。

④この列車はどこまでですか。

这趟车到哪儿？

上記の表現例①②③の「到」は“介詞”であるが、この「到」は“介詞”として用いられても、動詞性が極めて高い。④の「まで」に対応している「到」は動詞そのものである。「まで」には「から」の場合と同様に「までの」という形式が存在し、単独でも用いられる。従って、動詞性の極めて高い格助詞である。

三. あとがき

以上、中国語の介詞が有する意味素性ととともにその動詞性について検討し、これらの介詞と対応する日本語の格助詞について、その動詞性の有無について分析を進めた。

このような分析は、従来、統語論、語用論の分野においては全く目が向けられて以来なかったものである。しかし、このような分析の結果は中国語話者が日本語習得していく過程においては極めて有用である。なぜならば、中国語話者が日本語を習得する際には、当然のことながら母語干渉が生じ、日本語の格助詞を介詞とダブらせて受けとめるからである。

本稿において検討してきた中国語の介詞及び日本語の格助詞はそれぞれの

一部分であるにすぎない。それ以外のもの及び他の助詞についても詳細な分析を進めていくことを今後の課題とする。

注

- 1) 《日本文法講座》第九卷助詞 p. 112
- 2) 《現代汉语教程》p. 253
- 3) 黎锦熙《新著国语文法》参照
- 4) 王力《中国语法理论》参照
- 5) 《语法学习》参照
- 6) 《现代汉语语法讲话》参照
- 7) 《现代汉语教程》参照
- 8) 《岩波講座日本語 7 文法》p. 305
- 9) 晓娟《多重意义的格助词“で”》
- 10) 三浦つとむ《日本語の文法》p. 281
- 11) 《日本語の言語学》p. 457
- 12) 《日本語の文法》p. 294
- 13) 《岩波講座日本語 7 文法》p. 377
- 14) 佐藤富士雄論文“前置詞往，朝，向の機能差異について”例文参照
- 15) 《現代日本語法の研究》p. 144
- 16) 《岩波講座日本語 7 文法》p. 373
- 17) 《日本の言語学》p. 450
- 18) 《現代日本語法の研究》p. 147
- 19) 原田孝美子，滑本忠論文“在に対応する日本語の格助詞”

参考文献

- 《日本語用例詞典》
《現代漢語八百詞》